

菅茶山会報

第 11 号

発 行

菅 茶 山 先 生 会
遺 芳 顕 彰 会
2011年 3月 1日



菅茶山詩碑

閑 行

(所在 神辺町湯野 湯野山 東福院)

茶山ポエム絵画展

高 橋 孝 一

茶山ポエム絵画展が今年で八回目を迎える。今年も二千数百点の応募があり、菅茶山記念館での約六百点の展覧会を皮切りに、ふくやま美術館や県庁県民ギャラリーを初め、近隣の美術館等での優秀作品の巡回移動展の開催や、町内外の医院・歯科医院での展示も計画している。

わが町神辺は、そのむかし宿場町としてずいぶん栄えた。山陽道を往来する文人墨客が、かならず門をたたいたという菅茶山のいた町である。

郷土の誇る漢学者菅茶山は、黄葉夕陽村舎という、のちの郷校「廉塾」を開いて、学問の種を育てることに生涯をかけた。その建物は、国の特別史跡として往時の姿をそのままにとどめている。

茶山はまた、当時日本随一の漢詩人と称され、洛陽の紙価を高めたといわれる漢詩集「黄葉夕陽村舎詩」を残している。しかし、今のわれわれ凡人にはどうも読みづらい。まして活字ばなれの著しい若い世代に、郷土の偉人に親しんでもらう手立てはないものかと考えたのが、「茶山ポエム絵画展」である。茶山の漢詩を翻訳した現代詩Ⅱポエムからうけるイメージを、園児・児童・生徒に絵で表現してもらおうのである。これには年々応募数が増え、心ある人々の善意に支えられて、神辺の子供達の文化として定着し発展している。

ポエム絵画に表現された子供達の発想にはおどろくばかりである。絵の描き方ばかりでなく、実に意外な素材、たとえば絹、砂、わら、布、木の葉など、身近な素材がずいぶん使われている。新しい絵のジャンルを創っていると言えるかも知れない。

旧山陽道に面した町並みには、今でも四十軒あまりの格子戸の家がある。ベンガラ塗りの格子戸をギャラリーに見立て、「町並み格子戸展」と銘打って、ゴールデンウィーク期間中などに町並みに飾られるこれらの絵は、青竹の一輪挿しにいけられた野の花とともに、宿場町神辺を訪れる人々を楽ませている。

町の新しい風物詩である。

(菅茶山先生遺芳顕彰会会長)